

組成調査結果 概要

調査の目的

家庭から排出されるごみ（廃棄物）の減量や資源化を検討していくためには、どのようなごみがどれだけ出ているかを把握することが重要です。これを把握することで、効果的な施策を行っていくことが可能になります。

そこで本市では、今回の一般廃棄物処理基本計画の見直しに際し、組成調査（29分類）を行うこととしました。春夏秋冬と年4回実施する組成調査の結果を基にして、各種施策の検討を進めていきます。

調査結果

組成調査の結果の概要を以下に示します。

1. 可燃ごみ

単に可燃ごみ、不燃ごみ及びその他（排出容器、分類不能）の3つに区分すると、可燃ごみの排出割合が98.7%であり、適切に分別しているように見えます（図-1参照）。

しかしながら、ペットボトルは資源ごみとして収集・拠点回収しており、紙類（新聞紙、雑誌類、ダンボール、紙パック、コピー用紙等事務系用紙、紙製容器包装）や布類（タオル、シーツ、毛布等や汚れたものを除く）は集団資源回収が行われ、これらへ排出することが望ましいと言えます。

実際、ペットボトルが2.2%、資源化可能な紙類が8.4%、布類が4.9%（資源化できないものを含む可能性あり）あり、排出量全体の15.5%は資源化可能と見込まれます。

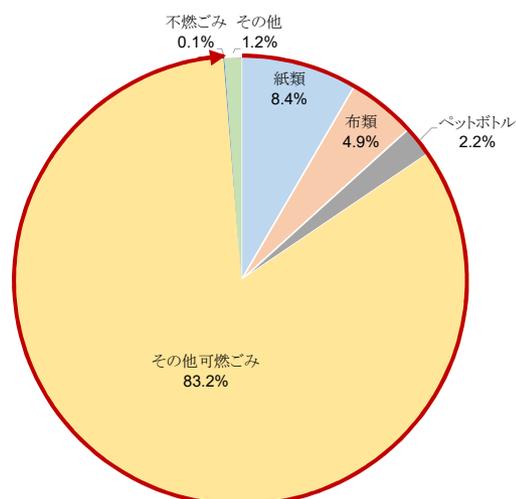


図-1 令和5年度 春季組成調査
(令和5年5月18日実施)

可燃ごみ組成割合(単位: %)*

また、家庭から排出された可燃ごみの 31.8% を占める生ごみ（ちゅう芥類）のうち、未開封品が 4.3%、食べ残しが 7.9% 含まれていました。これは、生ごみの中に、本来は食べられるのに捨てられた食べ物が 40% 近く含まれていたことになります（図-2 参照）。

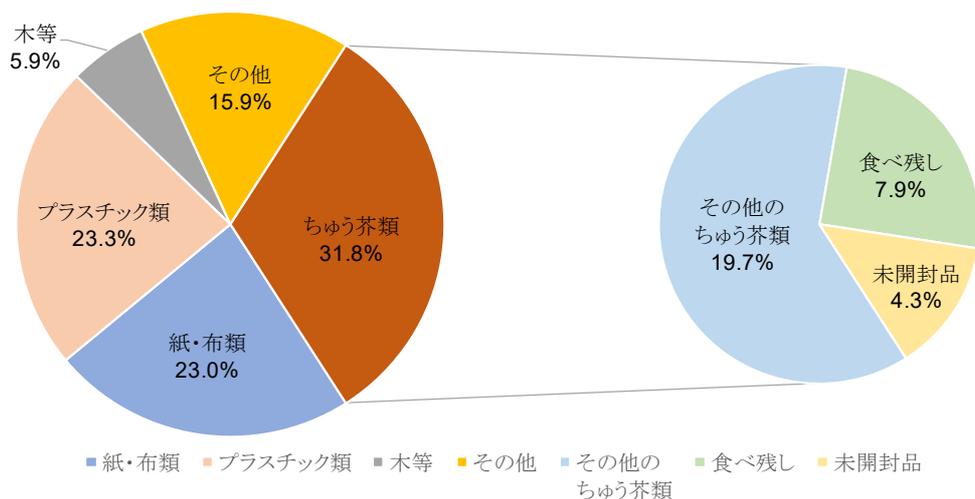


図-2 令和5年度 春季組成調査（可燃ごみ）（単位：％）

2. 不燃ごみ

不燃ごみも、可燃ごみ、不燃ごみ及びその他（排出容器、分類不能）の3つに区分すると不燃ごみの排出割合が 90.9% であり、ある程度適切に分別しているように見えます（図-3 参照）。

しかしながら、びんが 34.4%、缶が 15.7%、有害ごみ等が 0.3% 含まれており、これら以外の不燃ごみは 40.6% に過ぎず、不燃ごみとして排出される全体量の半分ほどが資源化可能であり、不燃ごみ以外のものが排出されていることがわかります。

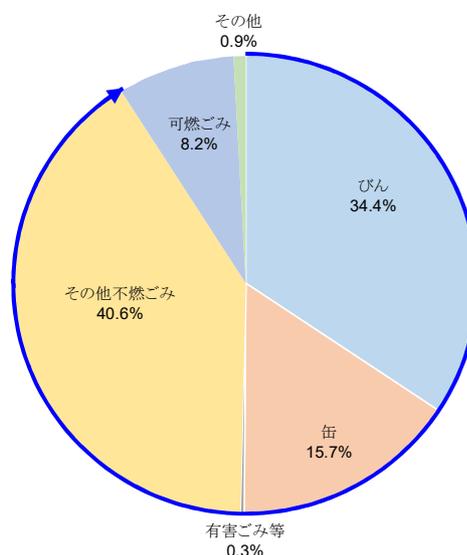


図-3 令和5年度 春季組成調査
（令和5年5月17日実施）
不燃ごみ組成割合（単位：％）※

※びん、缶には資源化できないものも含まれている可能性があり、また缶にはスプレー缶を含む。

3. 課題等

可燃ごみには 15.5%程度の資源化可能物（ペットボトル、紙類、布類）が含まれ、不燃ごみには 50.4%の資源化可能物と有害ごみ等（びん、缶、スプレー缶、有害ごみ）が含まれています。

これらを資源等として排出してもらうよう、より一層の啓発を行っていくことが必要です。



可燃ごみの調査対象試料



不燃ごみの調査対象試料



可燃ごみに含まれていた未開封品



可燃ごみに含まれていたペットボトル



不燃ごみに含まれていたびん類



不燃ごみに含まれていた缶類